

共感と想像力のあわいで

高谷 幸

在日移民女性の経験には、日本社会のジェンダー不平等や差別が刻印されていると感じることがある。職場での差別、家庭における家事・育児役割の押し付け、DV被害…。こうした彼女たちの経験が、私自身がこの社会で女として生きるなかで抱いてきた違和感と、どこか地続きだからかもしれない。

また、「日本はこうだから」「郷に入れば郷に従え」という言葉で、日本社会に同化を求められる移民の経験を聞いて、常に「ふつう」であることを求められ、同調圧力で息苦しくなった自らの経験を思い出し、共感を覚えることもある。

だが、そのような地続きの感覚はすぐに壁に突き当たる。脆弱な社会経済的地位、母語や母文化を否定される経験、法的権利など、マジョリティ女性の私と多くの移民女性がこの社会で置かれる位置や経験、享受できる権利の違いは大きいからである。そこを抜きにして、「同じ」であることのみを基盤にした共感は危うい。

こうした共感とはまた、「違い」や「わからなさ」に直面したときに脆い。例えば、生活が苦しいなかシングルマザーとして子どもを育てる移民女性をみて、「なぜ帰国しないのか？」という疑問をマジョリティの日本人が発するのを聞くことがある。その問いの前提には、自らが抱く「当たり前」がある。彼女たちは帰国先に生活基盤があるわけではなく、むしろ出身国の家族を助ける責任を負っていることも少なくない。また人生の可能性を切り拓こうと国境を越え、日本で暮らしてきた経験の蓄積もある。そうしたさまざまな背景も含めて他者の生は、しばしば自らの「当たり前」を揺さぶる。

しかし、そのような他者に出会ったときに、それでもなおその他者の生を想像しようとすることはできる。「ともに生きること」とは結局、共感と想像力のあわいで、自分と似ている面もあるかもしれないが、経験も生活様式もあるいは価値観も異なる他者が隣に暮らしていること、そのこと自体を認識することから始まるように思う。



PROFILE

たかやさち：大阪大学大学院人間科学研究科教員。NPO 法人移住者と連帯する全国ネットワーク（移住連）理事。京都大学大学院人間・環境学研究科修士。博士（人間・環境学）。専門は社会学・移民研究。著書に、『追放と抵抗のポリティクス—戦後日本の境界と非正規移民』（ナカニシヤ出版、2017）、『移民政策とは何か—日本の現実から考える』（人文書院、2019）など。